

### 第3回中心市街地のランドデザインを考える分科会記録

日 時 平成21年8月21日（金）19:00～20:00

場 所 小田原箱根商工会議所 4階 相談室

経 過

前回は出席者が少なかったため、19世紀中頃の小田原城址周辺の地図の上に、現代の地図を重ねて見比べができる仕組みの地図を見ながら雑談をしたところ、当時の町割りも現代も踏襲されているという話になり、今後、19世紀頃の町割りを参考にしながらランドデザインを今後も考えていってみたいかどうかという話になった。

今回の分科会においても、出席者により意見交換がされた。

#### <主な意見>

#### 【ランドデザインの描き方について】

##### ●一般的な描き方●

- ・前提として歴史というのが背景に入っていないといけない。歴史と未来のヴィジョンを合わせてテーマを皆で話し合っ決めて、小さなテーマを決めて、エリアの特色を皆で引き出して「こういうことができる」というのを10個20個出していければ。
- ・中心市街地活性化の活性化に繋がる魅力は多い。逆に遠くから来た人が「また行きたい」、住んでいる人が「住みやすい」というような今の目線がある。どういう形でこうなりたいというのを実現化させるのか
- ・最終的に11月までという目標がある。これに向けてまとめていくのにスケジュールを立ててやっていかないといけない。
- ・エリアを分割して担当制にし、それぞれに写真を撮りながら街歩きし、それを持ち寄って地図等に貼りながら意見交換ができれば。
- ・小さいながらも魅力のあるセンターがあれば人が歩けるようになるのでは(線としても面としても)まずは、みんなで「ここは良い」というのをピックアップして魅力再発見し、それを線で結ぶことができれば良いのでは。(今流行りの風鈴の音のする通りも含む)
- ・恒例イベントのような町の顔を沢山作った方が良い。今の顔を綺麗にするのも良いが、新しい顔も作り出すことがランドデザインではないか。
- ・ランドデザインのコンセプトを予め決めるのではなく、掘り起こしを行うことで出てくるそれぞれのキーワードが共通性をもつものになるかもしれない。
- ・ランドデザインの話はどうしようかという時には必ずゾーニングの話が出る。そういうことはどうしていくか。特徴が出ているベースのような「昔からのもの」「学園都市」「文化と歴史」「自然豊かな」「娯楽の」「商業の」という役割の様な、それが全体の姿。小田原はお城を中心とした城郭都市であるが、全てがある程度網羅されている。その辺りをどう配置させていくか。
- ・ひとつのスタンダード(ものさし)を作って検討しては。
- ・今は配置されている地区をリサーチすることで配置されているものを浮き彫りにする作業が必要。
- ・ハードだけでは街は変わらない。ハード(人の気持ち)が変わればもっと良い街になる。
- ・100年先の計画ではなく、現実として中心市街地の活性化をやろうといったときに

現実味あるプランではないと国から補助金も出ないので、そのバランスをとりながらや  
っていかないといけない。

- ・ゾーニングをすることによって、その範囲で活性化を考えるという形にすべき。
- ・現状の魅力を引き出す、現状はどうなっているのかを把握する。
- ・現代の街づくりをやる上で、人の繋がりが希薄になっている。自治会のエリアを把握し、自治会の動きを活性化させるのが重要。
- ・事業プランとしてはハードも良いが、人を巻き込むプランが必要になる。人を巻き込みながら街の風景変わることができれば人が係わる、ハートが変わるまちづくりのプランになる。
- ・ソフト面から変えるという点では、自治基本条例として「どんな街にしようか」というのが始まっているのでリンクしていく。地域の連合マップは地区の連絡協議会で進めて、その辺から「私たちの地域はこんな地域にしたい」というのが挙がってくる。それにリンクさせていけば。
- ・既存のコミュニティを把握し、そのエリアを地図に反映させる。既存の団体にお願いできることはお願いする。何をお願いするかについては考えていけば良い。
- ・地域連絡のコミュニティは自治会がある程度単位になっている。  
(次回、そのエリアが地図に落とし込まれている資料を小田原市が持参)
- ・緑地区については商店街や老人会、子供会、まちの人がハート面でどのようにしようかと話を進めているが難しい。
- ・小田原は様々な業種が点在しているが、1業種がまとまったら面白いのでは？という意見がある。しかし住んでいる人から見ると利便性から魅力が良くわからないので、住む人の目、観光客の目を分けながら考えていくべきランドデザイン。
- ・ツーデーマーチで、あるエリアを歩行者天国のようにできないか。その参加者にアンケートで「お城まで車の通らない道はどうか」といったことを調査できたら面白いのでは。民意としてそういう話が出れば、行政も動き出すのではないかと。

## ●歴史的背景を踏まえての描き方●

- ・横浜元町との違いは、元町はいわゆる商店街。小田原はお城。よって、ランドデザインのコンセプトは小田原では商店街独自のものだけはやっていけない。城郭都市・町屋との関係をどう考えていくか、また、景観としてのお城、城郭庭園都市、広場として見ていったらどうか。
- ・小田原が都市間競争に対抗するポイントは城郭。世界の注目を集められるような資源としての城郭都市。城下町としての整備の仕方と商店街のありかたを考えてみては。
- ・小田原と石川県金沢市との違いを比べた時に、金沢は大きな地震もなく戦火に焼かれてもいないことで400年間脈々と積み重なって今の町ができているが、小田原はそうではなく、町が一度壊れてしまっている(水路も然り)。
- ・小田原は城下町。城下町は侵入されにくく作られるため通りが悪い。しかしベニスの街のように、迷路のような通りが、常に発見を起こさせる例があるので「発見のある町」というテーマでもできる。今はベクトルが中心市街地に向いているが、ベクトルの向きを幾方向にむけられるのが良い都市と思う。
- ・小田原は日本でも珍しい囲郭都市であったが、江戸時代にその囲郭は外されていき、

大外郭が無くなってしまった。モータリゼーションや人口の入れ替わりも起こり、街は変わってきている。

- ・現実的に小田原の街のグランドデザインを作るとなった時に、今のもの全壊して江戸の町を作ろうというのは不可能。今ある状況を理解し、ひとつのコンセプトを決めて、そこにどれだけ近づくことができるかにある。大きな一つの方向性に小さな幾つものテーマが出てくる。小さなテーマ・街を構成している色々な要素(道路の面・明かり・水の音など)でどう表現するのか。様々エリアで特色づけ(歴史も含む)をやっていく。
- ・織物でたとえるならば今は虫食い状態。うまく一つのテーマで紡いでいき、大きな歴史城郭都市・城郭庭園都市などの大きなカーペットが敷ければそれがグランドデザイン。大きな意味でのグランドデザインではなく、街づくりのベースになるようなグランドデザイン。
- ・江戸までの歴史も重要なもの。江戸時代から明治時代、戦争を経て現代までの歴史も重要と思う。小田原の街を変えていこうといった時に、全てを壊して変えていくというのは現代のまちづくりには相応しくない。今あるものを利用し、できることからやっていくのが必要。
- ・あまり徹底的に小田原城復元・城郭復元まで行かなくても良いように思う。現実的な予算の範囲内で復元(用水も含め)できれば良いが。

### ●都市計画と用途地域をふまえての描き方●

- ・(用途地域の地図を見て)小田原市で計画する都市計画道路と用途地域、これが小田原の現在の姿。「そこからどういう事業ができるのか」をやっていき、中心市街地の活性化基本計画に反映させていくのが一番いいこと
- ・都市計画図に支配されているため、三の丸地域が商業地域になってしまっている。これでいいのかという見方も今起こっている。各地域のポイントを見るもの良いが気をつけるポイントとしておいた方が良い。
- ・ゾーニングの考え方としては用途地域を考えない形でやっていき、例えば「〇〇は××ではないよね」ということや、高さ制限の問題を見直すなどは部分的にやっていけるのではないか。

### 【歴史的背景について】

- ・稲葉城主時代の地図では、武家屋敷のエリアと商家が分かれていた。明治時代になると小田原は5つのエリアに分かれ、それぞれのエリアで山やお城等を管理していた。(地図) 明治政府は小田原城址を分断。この当時の町割りが現代にも踏襲されている。
- ・現在蒲鉾の店舗が連なる辺りは小田原の政財界が集まり、現在の本町あたりは旅館街、現在の法務局の建物には郡役所があり、道了尊へ行く馬車がそこから発車した。当時は旧かのやが小田原一番の繁華街。一丁田には米の取引所があった。
- ・明治16以来、3度にわたり大工町通り・銀座通りはセットバックをした。(現代においてセットバックに対する嫌悪感が根付いてしまっている。)

### 【水路等資源】

- ・銀座通りの裏あたりには水路があった。銀座通りと東宝の通りの裏手、国際通りの裏手にも水路があった。当時は道路に面して一つの町で、逆に水路が町の境になった。
- ・小田原は「松梅の町」海岸線に松並木があったので海の風が松を通り、ふくよかな風とな

った。また、水が縦横にあったので水の町ともいわれ、それを誇りにしていたのに、明治時代になると下水道になってしまった。下水道専用として使われる以前については、水路が上・下水道どのような機能を持っていたかは定かではないが、十字町の貴族町では2本水路があり、それぞれの用途で使われていた。屋敷から屋敷をつなぐ遣り水は各屋敷の池を繋いでいた。

- 現在の寺町の大乗院では2本重なって水路があった。小沢病院裏手・平井書店あたりにあった水路はお堀と繋がっていた。
- 当時は牢屋もあり、その付近の橋は「涙橋(なみだばし)」といわれた。
- 当時の水路のほとんどは八幡山からの水。(東口の駐車場あたりのもそう)

以上

<当日出席者> \*順不同・敬称略

岩瀬照子、櫻井泰行、小野意雄、金井俊典、永峰康次、平井義人、森本真由美